まもなく山開き、白さが美しく沢を強調していた羊蹄山の残雪も減ってきました。美術館からの羊蹄の眺めもぜひお楽しみください。

展覧会のお知らせ

常設展示

「小川原脩自伝風な展覧会―春・水辺」

春から初夏へ、季節を映す“水辺”を軸に小川原脩の画業を辿ります。

会期：4月25日（土）～7月12日（日）

企画展示

「武田志麻版画展～雲海のシンフォニー～」

赤井川村在住の木版画家・武田志麻さんの作品展。木版多色摺りの素朴で温かみのある線と色彩で表現された田園の情景などをお楽しみください。

会期：4月25日（土）～7月12日（日）

＊企画展関連イベント

技法体験ワークショップ『武田さんと多色木版のレッスン』

ハガキサイズの木版画作品に挑戦

日時：6月6日（土）、13日（土）※2週連続でご参加ください

定員：先着10名　参加費：材料費500円

申込：美術館へ電話（☎22-4141）　※定員になり次第締切

アート・イベントのお知らせ

■ミュージアム・コンサート

6月21日（日）14時～15時

「ギターデュオ“アンニュイ”アコースティック・コンサート～Sound of Voices～」

演奏：三谷幸久氏（クラシックギター、アコースティックギター）
三谷良典氏（アコースティックギター）

場所：当館ロビー（参加無料）

■土曜サロン

6月27日（土）14時～15時　印象派の旅（7）ちょっと楽しいフランス美術「アートな観光案内～モンマルトルのプチ・トラン」

講師：柴勤（当館館長）　場所：当館映像ルーム（聴講無料）

ミュージアム通信

小川原脩記念美術館
☎21-4141　FAX 21-4142
URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/

倶知安風土館
☎22-6631　FAX 22-6632
URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/kucchan-huudokan/

開館時間は9時～17時
（入館は16時30分）
6月の休館日2,9,16,23,30日

■木田金次郎美術館☎0135-63-2221
木田金次郎　百花繚乱
会期：開催中 7月 26 日（日）まで
絵の町・岩内：町民コレクション2
会期：6月17日（水）～7月12日（日）

■荒井記念美術館　☎0135-63-1111
ピカソ版画常設展「線の魔術師」
会期：開催中7月12日（日）まで
西村計雄常設展「自然に寄り添って」
会期：開催中8月23日（日）まで

■西村計雄記念美術館☎0135-72-2525
西村計雄・画業をたどる展覧会
「花～可憐で愛すべきもの～」展
会期：開催中7月12日（日）まで
おやこで楽しむ展覧会
「ときにはコレクターのように」
会期：開催中7月12日（日）まで

■有島記念館☎0135-44-3245
「山下隆博写真展『吹雪の日／凪の海』」
「新見亜矢子作品展」
「平成の『生れ出づる悩み』2014」
いずれも会期：開催中6月7日（日）まで

海と山と田園と　－ミュージアムロード情報－

フリーマーケット開催

■日時／6月20日（土）10時～14時
※雨天中止
■場所／倶知安風土館前庭（アプローチ）周辺
■出店／自由参加ですので、当日現地集合です。
皆さまのお越しをお待ちしております。

町長室から

6月に入り、羊蹄山の背後に輝く夏の天の川と水田に逆さ羊蹄が映り込む、この時期ならではの幻想的な風景を楽しむ季節となりました。

近年、気温や雨量などが平年値から大きく偏っており、豊かな農作物の育成のためにも、適度に雨が降ることを願っています。

5月中旬に、観光パートナシップ都市協定の日光市から日光東照宮の400年式年大祭に招待され出席しました。世界遺産の魅力発信・誘客促進事業をはじめ、街並み整備や自然環境の保護は、見習うべきところが多くありました。本町観光の更なる発展に向けて取り組んでいきます。

また、就任後初めて上京したので、北海道東京事務所をはじめ、スイス大使館や主な省庁への挨拶回り、要望を行ってきました。

6月は山菜取りが盛んになります。毎年、山での行方不明が多く、慣れた場所でも油断は禁物です。単独行動は避け、行き先や帰宅時間は家族に連絡し、携帯電話や非常食、熊除けのための鈴やラジオを携行してください。

これから夏季スポーツが本格化していきます。各小学校では運動会があり、子どもたちの元気な姿が見られることと思います。町ではパークゴルフ場に続き町営プールがオープンします。爽やかな汗をかき、家族や友人と親睦を深めていただければ幸いです。その際は、準備運動はしっかりと行い、怪我のないようお気を付けください。

西江栄二

感動の場 一点

『花と鳥』

1941 年頃　小川原　脩　画

「私は 1941 年頃からシュルレアリスムに関心を持ちながらも、次第に遠去(とおざ)かり始めた。個人の意思とは別に、私を取り囲むもの全てが、社会の一切が大きな圧力となって一つの方向に強く動いてゆく…」と小川原は述懐している。日中戦争から太平洋戦争へという時代、日本ではシュルレアリスム芸術運動が独自の高まりを見せていたが、それらは前衛的なものとして抑圧され次第に画家たちの自由な創作活動は制限されていく。小川原の作品も北海道の原野の姿を題材にするなど北方的ロマンティシズムへと移り変わっていった。

本作品の題材は庭先で目にするような草花と鳥。特段変わったものは描かれていない。しかし、攻撃的な視線のカラス、自由に身をくねらせているようにも見える枝葉に不自然なほどつややかな実をつけたトマト、そしてなんといっても大輪のダリアの存在感が目を引き、これらが再構成された画面からは、異様な空気感が漂う。題材を変えたとしても、根底には「新たな創作」を求める若い画家の意欲があるようだ。この作品もまた、昨年寄贈を受けたうちの一点である。

ふるさと探訪

387 回

低地の森

百年の森のヤチダモ林

倶知安の町はかつての湖の底にある。開拓時には湖は既に消え去っていたが、尻別川と倶登山川の合流する低地に位置するのだから、耕作に不適な湿地が多かったはずだ。

さて、倶知安原野への入植は八幡地区の小高い場所から始まったと聞く。入植地の森林を伐り始めて 3 カ月、ようやく空が見えるようになり、空を背景に美しい姿の山がそびえているのに気がついた、という話が伝わっている。それほどの大森林を当時は徒手空拳で拓くしかなかったのだから、入植者にとって森林は本当に邪魔な存在だったに違いない。

その大森林を形作っていたのは、ハルニレ、ヤチダモそしてハンノキなどの低地の肥沃で水分の多い土地を好む樹種である。ハルニレは開拓適地の目印とされ、上述のエピソードの舞台はハルニレ林だろう。ハルニレ林が畑に姿を変えた次は、ヤチダモやハンノキなどの湿地林に開拓が及んだ。排水溝を掘って水位を下げて森を水田とし、大森林に覆われていた倶知安低地から森は姿を消した。そして今では、開拓前の森の姿を伝えるのは百年の森だけになった。

低湿地を意味する谷地(やち)という言葉には「役に立たない」という意が込められている。そのためかヤチダモも積極的に利用しないが、英国王室が家具材として指定しているように、実は材として非常に優れている。辺材は白くてツヤがあり、心材は落ち着いた茶色をしている。それに広葉樹には珍しく、まっすぐな材が得やすい。このようなヤチダモを含む人手が余り入っていない低地の森が残されているのは倶知安では 1 カ所だけとなった。先達の偉業を偲ぶことのできるこの森を残す意味はとても大きいと思う。